

自 己 評 価 書

(令和4年度)

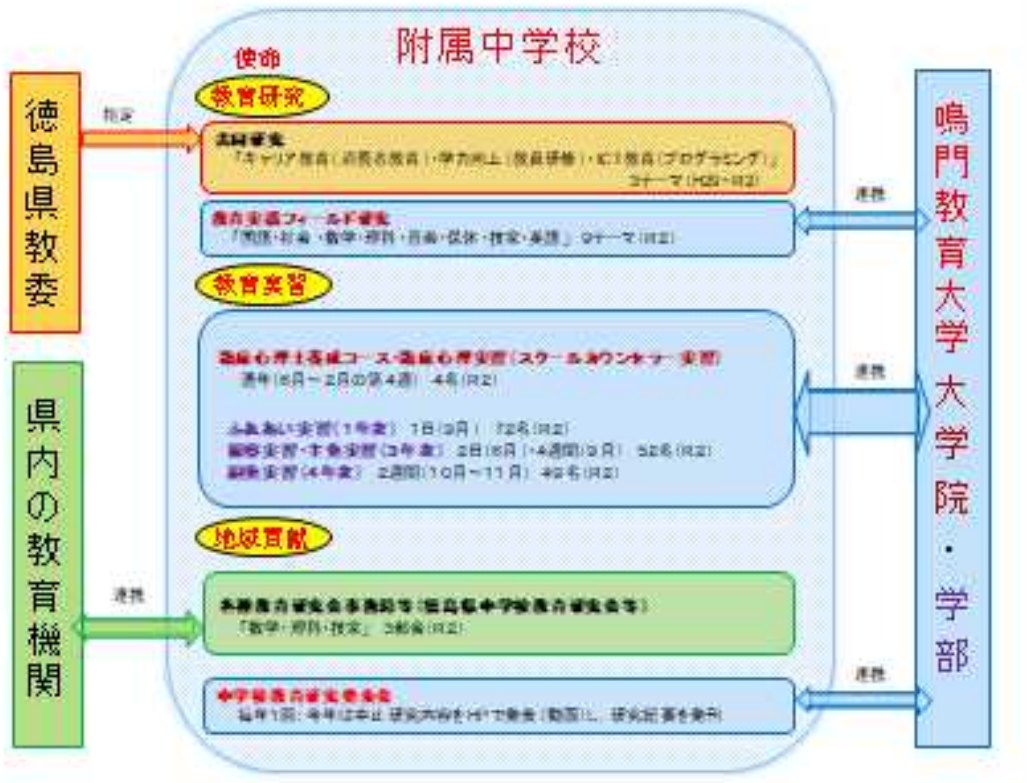
令和5年3月

鳴門教育大学附属中学校

目 次

I	学校の現況及び目標	1
II	重点目標に対する自己評価	2
1	主体的・対話的で深い学びの実現	2
2	いじめの防止	6
3	基本的生活習慣の徹底	9

本校の使命に関する取組状況



I 学校の現況及び目標

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属中学校
- (2) 所在地 徳島市中吉野町1丁目31番地
- (3) 学級等の構成
 - 1 学年 4 学級 2 学年 4 学級
 - 3 学年 4 学級 計12学級
- (4) 生徒数及び教員数(令和4年5月1日)
 - 生徒数 401人 教員数 24人(正規教員)

2 目標

(1) 目的・使命

本校の目的は、附属中学校校則第1条において「小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、鳴門教育大学（以下「本学」という。）における生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の実習等の実施に当たることを目的とする」と定めており、本校は義務教育を行う任務とともに、教員養成大学の附属中学校として、次のような使命をもった学校である。

- ① 大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学研究を行う研究学校としての使命
- ② 鳴門教育大学の学部学生の実地教育（教育実習）及び大学院生との教育実践研究等を行う使命
- ③ 教育界の課題の解明に努め、関係機関と連携し、本県中学校教育推進に寄与する使命

(2) 教育目標

本校は、校則第1条に示されている中学校教育の目的の達成のため、次の教育目標を掲げ、めざす生徒像・教師像・学校像を明確に示している。

知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。

めざす生徒像

- 優しく思いやりの心を持ち、人の気持ちがわかる生徒
- 目標を持ち、自主的、創造的に学ぶ生徒
- 強い意志と体をもつと共に、しなやかに生きる生徒

めざす教師像

- 生徒を愛し、生徒と共に伸びる教師
- ゆるぎない使命感、鋭い教育観をもった教師
- 優れた指導力をもった教師
- 強い責任感をもって、何事にも丁寧な対応ができる教師

めざす学校像

- 創造的な知性を磨く学問学校
- 情熱的な意志を鍛える鍛錬学校
- 強健な身体を練る体育学校
- 敬和奉仕の精神に生きる人間学校

(3) 令和4年度重点目標（実践事項）

- ① 主体的・対話的で深い学びの実現
 - ア 主体的に学習に取り組む態度の育成
一 粘り強い取組を促す手立ての工夫
 - イ STEAMIC（STEAM for I・C）教育の推進
- ② いじめの防止
 - ア 人を思いやる言動や周りへの気配りができる集団づくり
 - イ 対話等を通じた深い生徒理解と信頼関係の構築
- ③ 基本的生活習慣の徹底
 - ア 校内で出会うすべての人に自分から元気なあいさつができる習慣付け
 - イ 時間の厳守や清掃等、決められたことが確実にできる集団づくり

(4) 令和4年度評価項目（評価指標）

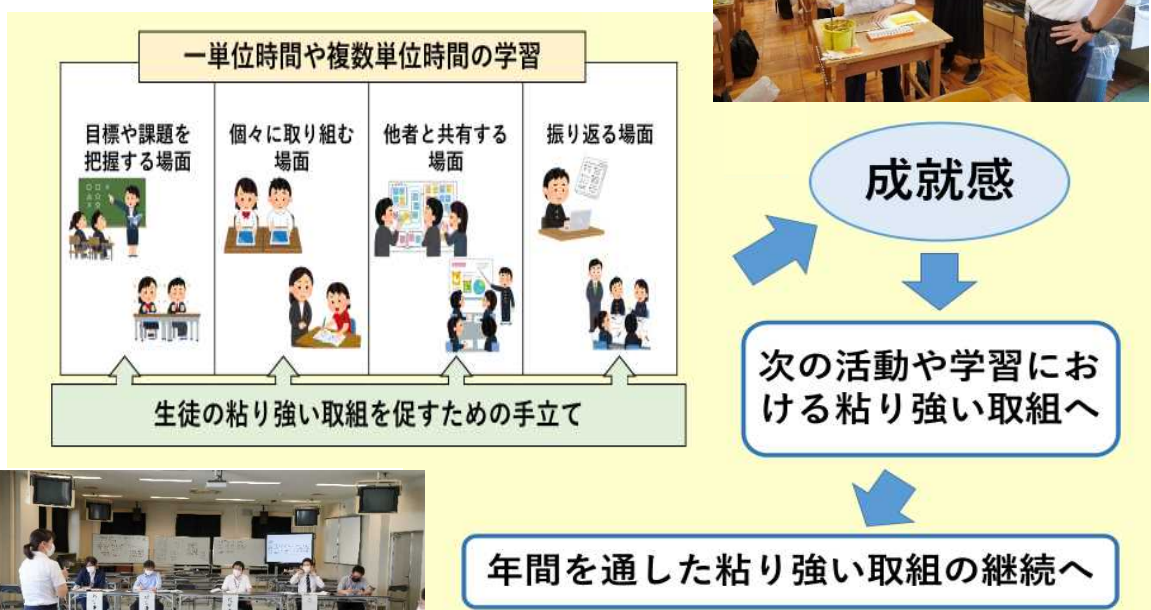
- ① 主体的・対話的で深い学びの実現
 - ア 保護者対象アンケート（7月と2月に実施）
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
「学習指導」
- ② いじめ防止
 - ア 保護者対象アンケート（7月と2月に実施）
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
「児童生徒指導等」
- ③ 基本的生活習慣の徹底
 - ア 保護者対象アンケート（7月と2月）
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
「学級経営・学校運営・校務の処理・その他」

Ⅱ 重点目標に対する自己評価

重点目標1 主体的・対話的で深い学びの実現

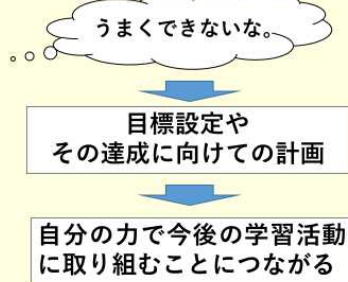
文部科学省「中学校学習指導要領解説 総則編」では、学校教育を通じて育む資質・能力を、「生きて働く『知識・技能』の習得」「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」の三つの柱で整理している。本校では、令和3年度より、「学びに向かう力、人間性等」の中の「主体的に学習に取り組む態度」の育成に向けて、研究や実践に取り組んでいる。主体的に学習に取り組む態度を育成していく上で、生徒が目標の達成や学習課題の解決に向けて粘り強く取り組み続けることは必要不可欠である。そして、粘り強い取組を続ける中で自らの学習を調整しようとすることによって、主体的に学習に取り組む態度が育成されると考える。そこで、本年度は粘り強い取組に焦点を当て研究を進めることとした。それによって、生徒の粘り強い取組が実現し、生徒の自己調整しようとする力もさらに高まっていくものと考えられる。

本研究では、一単位時間や複数単位時間の学習をそれぞれ「目標や課題を把握する場面」、「個々に取り組む場面」、「他者と共有する場面」、「振り返る場面」の四つの場面に分けた。その各場面において生徒の粘り強い取組が実現されるような手立てを講じていくことで、その学習の全体を通して、生徒の粘り強い取組が継続されることになる。生徒は粘り強く取り組んだことに対して、成就感を感じるとともに、その経験を生かし、次の活動や学習にも粘り強く取り組んでいくことができるようになると考えている。



①目標や課題を把握する場面における手立ての例－英語科の実践より－

手立て 単元の最終課題に類似した課題に取り組ませる



研究における総括

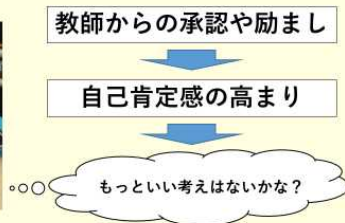


① 目標や課題を把握する場面

- 生徒の興味や関心を喚起するような手立て
↳ 今後の活動に向けての意欲が高まる。
- 自己の学習状況を把握し、その後の学習の流れを見通すことができる場の設定
↳ 自分の力で学習を進めることにつながる。

②個々に取り組む場面における手立ての例－保健体育科の実践より－

手立て 個々の生徒の考えを認め励ます個別指導を行う



研究における総括

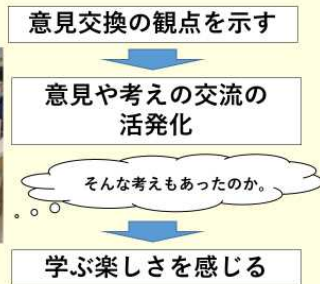


② 個々に取り組む場面

- 個々の生徒の考えを認め、励ます個別指導
↳ 生徒の自己肯定感が高まる。
- 知識や技能等を活用するための支援
↳ 自分の力で考え続けることができるようになる。

③他者と共有する場面における手立ての例－家庭分野の実践より－

手立て 調理時間や価格など、意見交換の観点を示す



研究における総括

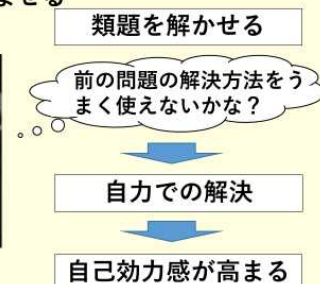


③ 他者と共有する場面

- 互いの意見のよさを述べ合ったり、学習の成果を評価し合ったりする場の設定
↳ 生徒の自己効力感が高まる。
- 互いの意見や考えを比較したり、分類したりする場の設定
↳ 自己の考えが深まるため、学ぶ楽しさを感じる。

④振り返る場面における手立ての例－数学科の実践より－

手立て 前の問題の解決方法を利用させながら、類題に取り組ませる



研究における総括



④ 振り返る場面

- 学習の成果を確認させ、これまでの生徒の粘り強い取組の過程の承認
↳ 生徒の自己効力感が高まる。
- 一単位時間や複数単位時間の学習を振り返らせ、自らの考えの深まりを自覚させる場の設定
↳ 生徒は達成感を得たり、学習内容のよさや必要性を実感したりする。

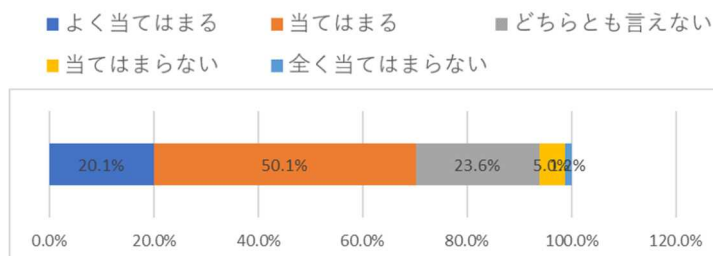
☆ 評価項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「先生は、一人一人の生徒の学習状況を理解し、力が付くように指導している」

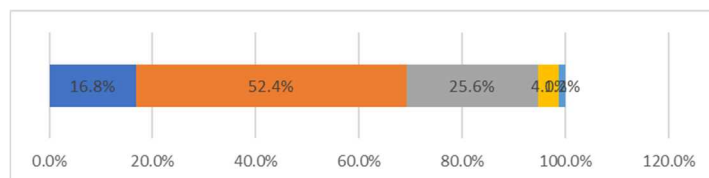
第1回（7月）70.2%（昨年度 67.7%）

よく当てはまる	20.1%
当てはまる	50.1%
どちらとも言えない	23.6%
当てはまらない	5.0%
全く当てはまらない	1.2%



第2回（2月）69.2%（昨年度 75.5%）

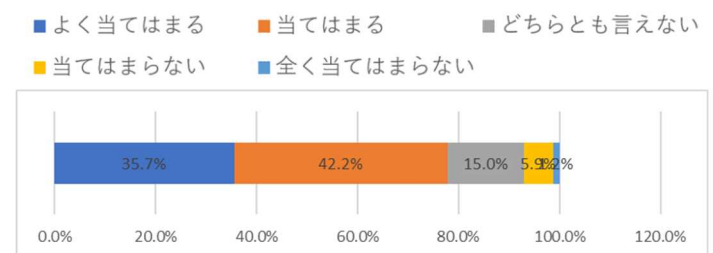
よく当てはまる	16.8%
当てはまる	52.4%
どちらとも言えない	25.6%
当てはまらない	4.0%
全く当てはまらない	1.2%



「自分の子どもは学校の出来事や時事問題について、毎日家族で会話している」

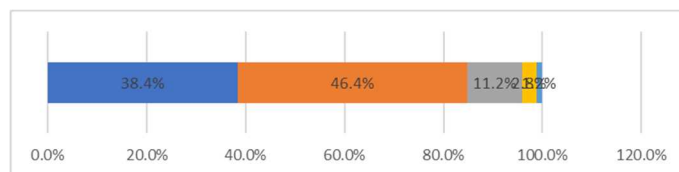
第1回（7月）77.9%（昨年度 72.1%）

よく当てはまる	35.7%
当てはまる	42.2%
どちらとも言えない	15.0%
当てはまらない	5.9%
全く当てはまらない	1.2%



第2回（2月）84.8%（昨年度 72.1%）

よく当てはまる	38.4%
当てはまる	46.4%
どちらとも言えない	11.2%
当てはまらない	2.8%
全く当てはまらない	1.2%



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 主体的に学習に取り組む態度の育成－粘り強い取組を促す手立ての工夫－

当初申告	最終申告	評価
主体的・対話的で深い学びが実現するよう、学習形態や学習過程を工夫し、生徒が楽しくわかる授業を創造するための授業改善を行っていく。導入の工夫をする。	授業の導入や形態を工夫して授業を構築した。コロナ禍ではあったがグループ討議やホワイトボードミーティングなどを時間を区切って行うことができた。導入では毎回一人ずつの声が聞けるように工夫できた。	A
題材ごとにめざすべき生徒の姿を明確にし、適切な手立てを行って課題に向かわせることで、生徒の8割には達成感や充実感を抱かせる。	生徒がわくわく感を抱くような題材の目標を設定することにより、見通しを立てて取り組む前向きな姿勢や発問に対しての反応が活発化した。2年生の生徒への手立てに際しては、全ての生徒に十分に行き渡らなかった点があった。	B

イ STEAMTIC (STEAM for I・C) 教育の推進

当初申告	最終申告	評価
技術分野の中にある他教科の横断的な学習部分について示し、思考のもととなる原理を伝える。	3年生では社会的な問題に対しての課題をテーマとして製作を行った。その中で問題を各教科の視点から見つめ、課題をあらわにする姿が見えた。	A
書籍を読み、実践例等を参考にしながら、全学年の鑑賞、創作の分野の中に1回ずつ取り入れて学習効果の上がる方法を1つは生み出す。	初めは音楽の中に数学的な思考や科学分野を融合させたものとして捉え、様々な書籍を読んでいたが、研究委員として動き始めてからはSTEAMの捉え方が変わった。まだ実践はできていないが、まずはSTEAM教育によって高められる力を明確にして授業に取り入れていきたいと考える。	B

★ 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点 (成果)

- 粘り強い取組を促す手立てを講じることで、生徒は目標の達成や学習課題の解決に向けた取組を継続させていこうとする意志や意欲を高めることができた。また、最後まであきらめずに試行錯誤し成功体験を積み重ねることで達成感や自己効力感等を感じさせることができた。
- 6月の研究発表会は、今年度も、県内教職員は対面参加、県外参加者や学生等はオンデマンド配信とした。合わせて300名程度の参加があり、本校の研究の成果を広めることができた。
- 全国学力・学習状況調査(国語・数学・理科)については、学力や学習に対する興味・関心が、全国や徳島の基準を上回っている。

(2) 改善を要する点 (課題)

- 今年度から進めているSTEAMTIC教育の推進については、現在研究理論を練っているところで、授業実践はまだできていない。次回の研究発表会に向けて、教科教育とSTEAM教育の関連性を明確にし、授業実践を重ね、研究成果の発信が必要である。

- 保護者対象アンケートでは、「先生は、一人一人の生徒の学習状況を理解し、力が付くように指導している」の評価が、肯定的回答80%の目標に到達していない。また、後期の評価が、前期や昨年度と比較して低くなっている。個に応じた指導の充実をすべての教員が意識し図る必要がある。

以上の内容を統合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である
* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ	

重点目標2 いじめの防止

「附属中学校いじめ防止基本方針」を基に、いじめの防止・早期発見・対処に学年団を中心として組織的に取り組んだ。児童等の豊かな情操と道徳心を培い、心の通う対人交流の能力の素地を養うことが、いじめの防止に資することを踏まえ、全ての教育活動を通じた道徳教育及び体験活動等の充実に取り組んだ。感染状況を踏まえた感染防止対策を講じつつ、学校行事、学年集会、学活等の活動を行った。安心・安全な学級づくりや相手を思いやれる仲間づくりには、体育祭や文化祭等の学校行事や体験活動は重要である。今年度も、「感染防止」と「教育活動の意義」のバランスのとり方に苦慮しつつの一年であった。そのような中、文化祭は、劇やダンスを披露する3年生にとっても、それを鑑賞する1・2年生にとっても、有意義な行事となったようである。また、いじめに関する学校生活アンケートやQUテストの結果を分析し、生徒の状況把握や学校はいじめ防止対策の検証を行った。アンケート結果から、全校生徒に向けたメッセージをいじめ防止担当より配付した。

学校生活アンケートの結果について

7月に実施したアンケートに、協力してくれてありがとうございました。自由記述の欄には、自分の思いや意見を一生懸命書いてくれた人がいました。一部紹介します。

＜学校生活が楽しい理由＞
 ・一緒にいて落ち込んでも大丈夫だし、授業が楽しい。
 ・学校に来て、みんな勉強したり遊んだりするのが楽しいから。また、この学校に来ていて、様々な知識から来た子がいて、いろいろな悩みなどを共有できるから。
 ・友達の良いところ
 ・どんなときもいろいろな人の気持ちを考えて行動していること。
 ・自分の元気がない時でも話を聞いてくれたり、話を聞いてくれたりする。
 ・私の話をしっかりと聞いてくれて、自分の意見をわかりやすく話してくれるような人がいる。「どうしてこうなのかなんどう？」などと聞くのは思いがけないようなことを学びたいから。
 ・よく自分の周りに友達が集まり、賑やかな状況が生まれる。自分が話したことによって笑ってくれる人がいる。
 ・友だちと関わる中で自分の立場を見分け、学校生活を楽しんでいるという意見を書いてくれた人がたくさんいました。ともに過ごす時間が楽しく、人の気持ちをしっかりと考えてくれる仲間がいることは誰にとっても目を輝かせる理由だと思います。大切なことです。
 ・また、こんな思いを書いてくれる人もいました。

＜メリハリがつけられていない人がいる。(掃除もって一生懸命しる良いと思う)＞
 ・心ざけられている中で、嫌な気持ちになる。
 ・今まで友達の間で話さずに目をつぶっていたが、少しづつ減っている。お互いの良いところを認め合える関係になりたい。

もってみんなとよく学校生活を続けたい。嫌いな日は通っている人もいます。自分の行動を客観的に見て、相手のことを思いやる行動を積極的にしていきたいです。

最後にありがとうございました。人の話をしっかりと聞いてほしいです。みなさんは、今年の「基礎学力アップ」の勉強をがんばって、大人のコナガが家族の力をとらうとする人になる場面があります。そこで彼がその人に伝えたいことは、何かを得る言葉ではありません。コナガはその人の手を握って話を下ろさせ、黙ったままそっと抱き締めるのです。抱き締めると、抱き締めた人の涙が、いろいろな複雑な思いを涙かたして、みなさんの周りに思いが伝えている人はいませんが、相手の抱き締めを本心に理解しよう。寄り添おうとする思いは、あなたの涙かたとなり、多くの人の涙となることでしょう。

2階ホールで「あじさい」の鑑賞会を開催しました。カラセウラの鑑賞です。おまけにこの手紙は、カラセウラやあじさいの鑑賞会では、読者と一緒にあじさいの絵を描いてもらいます。カラセウラやあじさいの鑑賞会では、あじさいの絵を描いてもらいます。あじさいの鑑賞会では、あじさいの絵を描いてもらいます。あじさいの鑑賞会では、あじさいの絵を描いてもらいます。



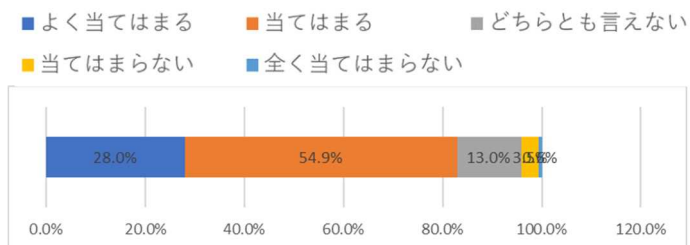
☆ 評価項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「学校は、教師と生徒、生徒相互の人間関係が円滑である」

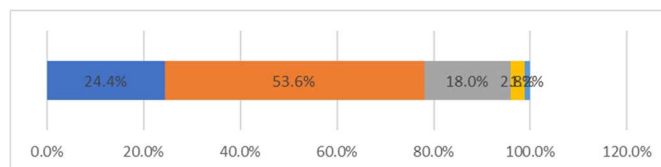
第1回（7月）82.9%（昨年度 81.5%）

よく当てはまる	28.0%
当てはまる	54.9%
どちらとも言えない	13.0%
当てはまらない	3.5%
全く当てはまらない	0.6%



第2回（2月）78.0%（昨年度 83.9%）

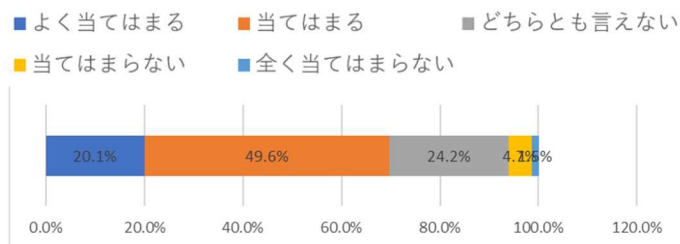
よく当てはまる	24.4%
当てはまる	53.6%
どちらとも言えない	18.0%
当てはまらない	2.8%
全く当てはまらない	1.2%



「附属中学校の生徒は、互いに相手の思いや立場を踏まえて会話している」

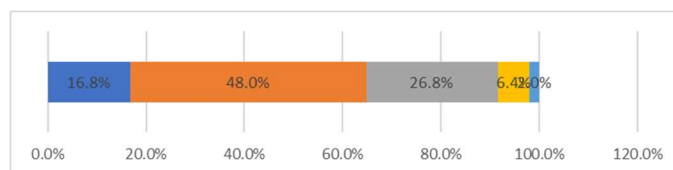
第1回（7月）69.6%（昨年度 62.3%）

よく当てはまる	20.1%
当てはまる	49.6%
どちらとも言えない	24.2%
当てはまらない	4.7%
全く当てはまらない	1.5%



第2回（2月）64.8%（昨年度 67.0%）

よく当てはまる	16.8%
当てはまる	48.0%
どちらとも言えない	26.8%
当てはまらない	6.4%
全く当てはまらない	2.0%



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 人を思いやる言動や、周りへの気配りができる集団づくり

当初申告	最終申告	評価
生徒の良いところを具体的に褒めて承認することで、自己肯定感を得させ、励まし支え合う温かな集団づくりを目指す。	アンケートを実施した結果、肯定的な意見が90%となった。大きなトラブルもなく、不登校傾向の生徒も見られなかった。心ない言動をしてしまう生徒もいるため、引き続ききめ細やかな生徒指導が必要である。	A
級友のために自ら行動できた生徒を積極的に褒める。また、学級通信に思いやりの言動や気配りの具体を掲載する。	朝学活や帰り学活で具体的に褒めるように心掛けた。学級通信は後期から発行できていない。	B

イ 対話を通じた深い生徒理解と信頼関係の構築

当初申告	最終申告	評価
生徒だけでなく、保護者の方とこまめに連絡をとり、相談しやすい関係をつくる。	参観日や文化祭等、学校行事を見られなかった保護者に連絡をして生徒の頑張り伝えるなど、「何かあったから連絡する」という形とは異なる密なコミュニケーションをとることに努めた。	A
日直と二者面談し、生徒の何気ない仕草や言葉からSOSにいち早く気付くことができるようにする。	短時間ではあるが簡単な二者面談を実施し、困っていることはないかなど話をした。また、様子が気になる生徒には時間をとって話をじっくり聞くようにした。	B

★ 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点(成果)

- 各担任が、生活記録や休み時間での会話等を通して、生徒理解や生徒同士の間関係の把握に、可能な限り努めた。
- 学年通信からの発信や道徳や学活の授業を通して、自尊感情の向上やぬくもりのある集団づくりにつながるように、各学年が同一歩調で工夫した活動を行うことができた。
- 状況に応じた感染対策を講じつつ、文化祭や体育祭、修学旅行などの学校行事を行った。

(2) 改善を要する点(課題)

- 年3回実施予定であった学校生活アンケートが、7月と2月の2回しか実施できず、実態把握やいじめの早期発見に向けた取組が不十分であった。
- 学校評価アンケートでは、「学校は、教師と生徒、生徒相互の間関係が円滑である」と「附属中学校の生徒は、互いに相手の思いや立場を踏まえて会話している」について、どちらも後期の評価が、前期や昨年度と比較をして5%程度下がっている。また、「どちらとも言えない」と回答した割合は、増えている。様々な場面を通しての相手を思いやる心の醸成や居心地のよい集団づくりが必要である。さらに、教師と生徒、学校と保護者の信頼関係の構築のための対話等の充実が必要である。

以上の内容を統合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である
* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ	

重点目標3 基本的生活習慣の徹底

生徒が有意義な学校生活を送る上で基盤となる基本的生活習慣の徹底を図るべく、特に「校内で出会うすべての人に自分から元気なあいさつができること」「時間がしっかりと守れること」「掃除が丁寧にできること」「人の話がきちんと聞けること」の4つを重点目標として、取り組んだ。生徒指導担当が中心となって、生徒の状況に応じた指導内容や方法の共通理解を、職員朝会等で適宜図り、きめ細かく継続した指導を続けているが、「大きな声で自分からあいさつをすること」「5分前行動を意識し時間を守ること」の徹底は難しいと感じている。また、生徒の自治的な活動として、生徒会本部役員を中心に行っている朝のあいさつ運動や、執行委員会（議員会・生活委員会・整美委員会等）での活動がある。



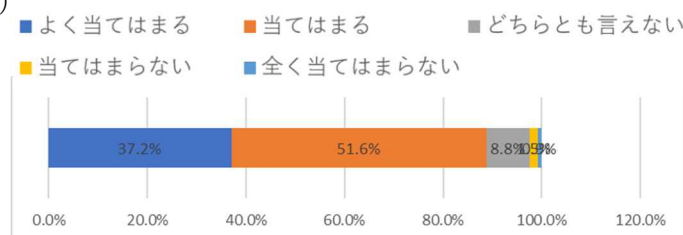
☆ 項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「学校は、落ち着いて学習に取り組める雰囲気がある」

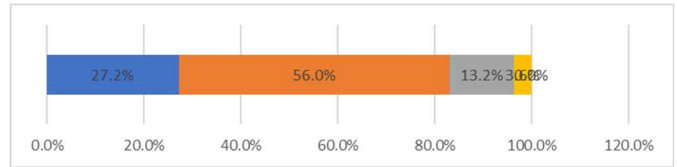
第1回（7月）88.8%（昨年度 82.7%）

よく当てはまる	37.2%
当てはまる	51.6%
どちらとも言えない	8.8%
当てはまらない	1.5%
全く当てはまらない	0.9%



第2回（2月）83.2%（昨年度 87.3%）

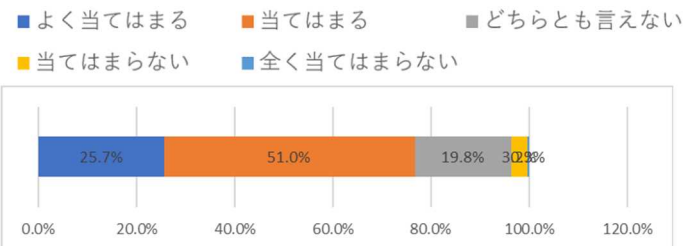
よく当てはまる	27.2%
当てはまる	56.0%
どちらとも言えない	13.2%
当てはまらない	3.6%
全く当てはまらない	0.0%



「附属中学校の生徒は、あいさつができています」

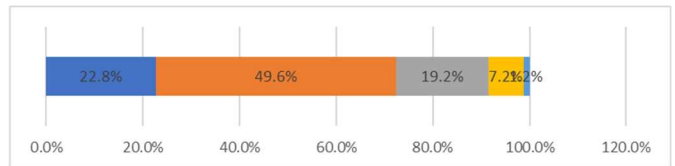
第1回（7月）76.7%（昨年度 71.3%）

よく当てはまる	25.7%
当てはまる	51.0%
どちらとも言えない	19.8%
当てはまらない	3.2%
全く当てはまらない	0.3%



第2回（2月）72.4%（昨年度 75.8%）

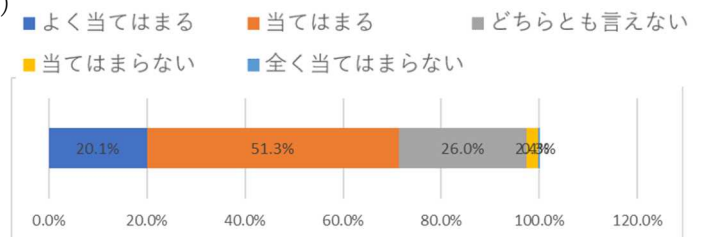
よく当てはまる	22.8%
当てはまる	49.6%
どちらとも言えない	19.2%
当てはまらない	7.2%
全く当てはまらない	1.2%



「附属中学校の生徒は、交通ルールやきまりを守っている」

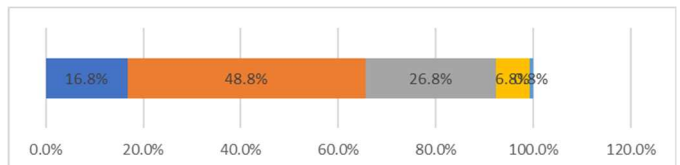
第1回（7月）71.4%（昨年度 67.7%）

よく当てはまる	20.1%
当てはまる	51.3%
どちらとも言えない	26.0%
当てはまらない	2.4%
全く当てはまらない	0.3%



第2回（2月）65.6%（昨年度 70.9%）

よく当てはまる	16.8%
当てはまる	48.8%
どちらとも言えない	26.8%
当てはまらない	6.8%
全く当てはまらない	0.8%



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 校内で出会う全ての人への元気なあいさつの習慣付け

当初申告	最終申告	評価
毎朝自分から生徒に笑顔で挨拶する。授業、部活での生徒のあいさつを見取り、適宜指導する。	笑顔で挨拶することはできた。授業も毎時間初めのスモールトークで生徒を元気づけた。また、部活での生徒のあいさつも元気よくできるように継続して指導した。	A
まずは自分から生徒に明るく挨拶をし、生徒に挨拶を意識させる。	挨拶の大切さを伝え、積極的に挨拶をするように心がけた。しかし、自分から挨拶を進んでする生徒はクラスの半分くらいに過ぎない。特に帰りよりも朝の挨拶が自分からできない生徒がいることが反省点である。	B

イ 時間の厳守や清掃等、決められた事が確実にできる集団づくり

当初申告	最終申告	評価
5分前登校、1分前着席を意識させ、時間にゆとりを持って取り組ませる。	5分前登校を継続できない生徒が数名いたが、1分前着席は意識をしてできていた。時間を守って、活動に落ち着いて取り組むことができていた。しかし、自主的に時間を見て行動できるような習慣がつかなかった生徒も多い。	B
学年集会や学年通信の紙面で小さな道徳の授業を行い、生徒の実態に応じた道徳教育を行う。	学年集会や学年通信で、様々な話題を用いて生徒の変容を促すために小さな道徳の授業を行うことができた。しかし、生徒の変容はほとんど見られなかった。学年通信を楽しみにしてくれている保護者もいると担任の先生から聞いた。	B

★ 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点 (成果)

- 教育実習や研究等多くの業務のある中、生徒のことを考え、休み時間の見守りや交通立哨、問題が起こったときの指導や保護者連絡等、丁寧な指導を各学年団で主任や生徒指導担当が中心となって行った。
- 生徒会の毎朝のあいさつ運動や、部活動顧問からの指導により、自ら大きな声であいさつのできる生徒が増えている。自分から元気よくあいさつができること、本校への来校者など普段関わりの少ない方に対してもあいさつができることを目指して、継続した指導を続けたい。

(2) 改善を要する点 (課題)

- 学校評価アンケートでは、「学校は、落ち着いて学習に取り組める雰囲気がある」は、肯定的回答の目標80%は超えているが、学年によって評価に違いがある。2年生は、後期の肯定的回答が66%で、他の学年より20%以上低い結果となっている。この結果は、学校における基本的なルールやマナーが守られ、前向きな学校生活を送ることができているかどうかの指標でもあると考える。この状況をすべての教職員が共通認識をして、どの学年も落ち着いてすべての活動にしっかりと取り組むことのできる集団となるよう、生徒指導等に取り組まなければならないと考える。

- 交通ルールやマナーを守ること，時間いっぱいより美しくという意識のもと清掃に取り組むことには，課題がある。継続した指導と，生徒会活動の工夫等により，改善を目指したい。また，学校評価アンケートで「自分の子どもは，交通ルールやきまりを守っている」の肯定的回答が92%であるのに対し，「附属中学校の生徒は，交通ルールやきまりを守っている」の肯定的回答は66%である。一部の生徒から附属中学校全体を捉えているのか，この25%を超える差の根拠を探るとともに，保護者との連携も必要であると考え。

以上の内容を統合し，4段階中の「 C 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが，成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である
* 評価項目ごとの自己評価の基準は，以下同じ	